参考資料

１－２．これからの公共施設が目指すビジョン（イメージ）

本市が描く、これからの公共施設が目指すビジョンについてイメージを具体化することを目的に、ある公共施設の１日の使われ方を描きました。

ある公共施設の１日ー「つながる場所・つながらなくてもいい場所」

朝陽がゆっくりとガラス窓を照らし、開館準備をする職員がロビーのテーブルを整える。ここは市民が自由に集える場。目的がなくても訪れたくなる、そんな温かさがある。

午前：静かなひとときと偶然の出会い

開館直後、カフェスペースではコーヒーを片手に新聞を広げる高齢者。隣の席には、タブレットを開きながら静かに作業している若者。ふとしたきっかけで言葉を交わし、地元の話で盛り上がる。年齢も立場も違うが、この場所があるから、自然に会話が生まれる。

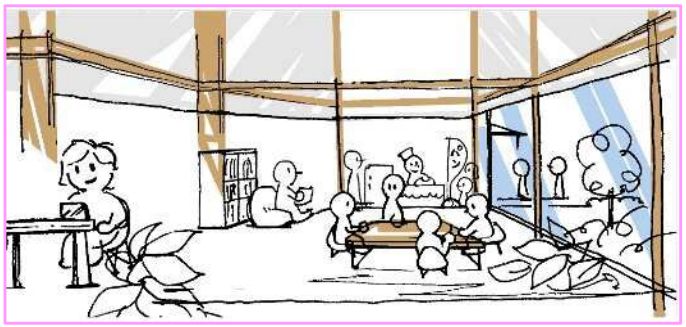
奥のスペースでは、地域の子育て支援グループが活動を始める。「今日は何のイベントがあるの？」そんな会話が飛び交い、予定になかった参加者も輪に加わる。

午後：同じ場にいながらのそれぞれの過ごし方

昼過ぎには、学校帰りの学生がフリースペースに集まる。大きなテーブルでは自主学習をする子どもたち、壁際のソファでは読書をする若者たち。目的が決まっているわけではなく、ただ「居場所」としてここにいる。

一方、窓際の席では、静かにノートに何かを書き込んでいる人がいる。仕事のアイデアを書き留めているのか、それとも日記を綴っているのか…　周囲の賑わいを感じながらも、一人で思考を深める時間を過ごしている。

奥のスペースでは、近所のパン屋さんが「手作りパン教室」を開催。「ちょっと興味があったんだけど…」と立ち寄る市民が、気軽に参加できるのがこの施設の特徴だ。部屋の用途は固定されず、空間を自由に使うことで、市民のアイデアが広がっていく。



夕方：つながりと新しい活動のきっかけ

夕方になると、長机を囲んで「地域のまちづくり会議」が始まる。地域の防災対策や子育て支援について、様々な世代の市民が議論を交わす。多目的な空間だからこそ、議論の敷居が低く、誰でも気軽に参加できる。

その横では、ピアノの静かな旋律に合わせてギターがそっとセッションを始める。音の重なりが場を優しく包み込む。『何かやろう！』と決めなくても、人が集まることで自然と文化活動が生まれる。この空間は、一人ひとりが主役になれる場だ。

イメージ図

夜：また今度来たくなる居場所

閉館の時間が近づくと、職員が今日の出来事を振り返る。誰かが出会い、誰かが学び、誰かが楽しんだ場所。目的がなくても来たくなる、ここにいることで何かが生まれる。
「また来るね。」と施設を後にする人々の表情には、温かい笑顔が広がっている。

イメージ図